

6月のある日、岐阜の犬山で会議があって出かけた。会場が木曾川をへだてて犬山城の対岸にあり、ついでに犬山城とその周辺を散策した。

犬山城は1469年、織田広近によって築城されたが、現在国宝になっている天主閣は、1599年に石川光吉が金山城の天主閣をこの位置に移し改造したものだそうだ。とにかく現存する天主閣では日本最古のものであり、天主閣から見下す景色は壮大で、自分が大名にでもなった気分になる。

眼下に流れる木曾川にはダムが建設され、ダム頂が橋になっていて、車も往来していた。ぶらぶらとその橋を渡って会場にもどりかけた時、めずらしい光景を見た。

それは鮎の大群である。鮎は溯河魚で春から初夏にかけて成長しながら川を上ってくるのであるが、こんな大群は初めて見た。体長は10cm位と思われる鮎が、ダムの下流に茶褐色の帯状にむらがっていた。その帯が左右にゆらゆらとゆらいで、それはダムの片端に作られた階段状の魚道に向かっているのがある。よくみるとゲートの2個所に漏水があり、そこから水が音をたてて流れている。その下流にも鮎の帯ができていた。

これだけ沢山いるのなら、鮎ももっと安くていいはずだが、この大群に投網を放ったら笑いが止まらないだろう……、と思ったらそれは禁止するという立札がたっていた。

魚道を見ていると鮎が銀鱗をキラつかせてジャンプを繰返し、1段1段上っていくのが面白い。なかにはコンクリートの側壁に飛び上がってピンピン跳ねているものもある。運のいい鮎は跳ねてきた魚道にもどっていくが、跳ねるたびに魚道から遠ざかり力尽きてノビてしまうものもある。多分そのまま干物になってしまうのだろう。

これは人事シミュレーションの動きを見ているような感じがした。単位時間内に上の段に跳ね上がる確率、上がれないで滞留する確率、側壁に上がってしまう確率……を推定して時間を動かしていけば、ほしい時点での状態が推定できるだろう。いわゆるマルコフ・プロセスであろう。最上段まで上がりきって瀬に達した奴はさしづめ役員に昇格ということか、側壁に跳ね上がってしまっ

た奴は休職か、ノビてしまったのは休職後死亡だぞ可愛そうに、途中で力尽きて流れに押し流されていくのは停年退職ということかな等々……、いろいろと思いつめてみた。

また、ゲートの漏水個所に眼をやれば、急流に逆らって流れの方向に約45°の角度で1匹また1匹と上がっていくのが見える。しかし、ゲートの鉄板に阻まれてまた川に押しもどされてしまう。そこに群がっている鮎達は行止まりであることを知らないから、何度も何度もひたむきに挑戦していた。網か何かでうまく魚道のほうへ誘導してやれないものかと思いつてみたが、途中で洲があってかなり下流にもどさないと主流には帰れないのである。鮎は自力でもどって洲を迂回して魚道のある主流にもどることはしない。それは上から見ているわれわれがもっているような情報をもっていないからであろう。運

が悪いということだろうか……。

会議の後の夕食会は木曾川に浮ぶ鴨舟、対岸の小山の上に立った犬山城の天守閣など美しい夜景を見ながら、上り鮎の話に花が咲いた。

上 り 鮎

鮎は本能というか、自分の運命づけられた行為をひたむきに命がけで実行している。それに引き換え、われわれ人間はどうだろうか。職場では、

“あのポストは割合に楽で、少し頑張ると目立って昇進しやすいぞ”

“君の職場は残業も多いし、努力してベテランになった人が釘づけになってしまうケースが多いから気をつける”

という情報過多の中において、努力を惜しみながらもほしがるものは人1倍という人もいるし、努力をしても道を誤ったと言って挫折してしまう人もいる。

先輩と言われる人は後輩に対して、情報を与えることは確かに好ましいことではある。しかし、ひたむきに努力することも教えてほしいと思う。

小生の拙い経験を思い出しても、追い込まれて追い込まれても最後まで望みを捨てないで努力した時の仕事は、楽をして解決した時の仕事よりはいい仕事をしていたように思う。読書の秋、上り鮎にならって今日はひたむきに本を読んでやろう。

(M. M.)